小澤重男先生を偲ぶ

小澤重男先生を偲んで

In Memory of Professor Shigeo Ozawa

橋　本　　勝
（大阪外国語大学名誉教授）
HASHIMOTO Masaru
（Professor Emeritus, Osaka University of Foreign Studies）

小澤重男先生が今年3月21日にお亡くなりになったことについては、しばらく経ってからその報に接した。これまで日本モンゴル学会、ウランバートルでの国際モンゴル学者大会、フフホトでの内蒙古大学国際モンゴル学シンポジウムなどでいつも先生のお元気なお姿を拝眉し親しくお話を伺っていた。今振り返ると小澤先生のお名前は、大阪外国語大学の学生時代から著書『モンゴル語四週間』（昭和38年）を通じて知っていたが、直接、お目にかかるようになったのは1970年、私が大阪外大の教員になって確か日本モンゴル学会が創立した1971年のころであったと記憶している。先ず、先生は、温顔でいつもゆっくりと物静かにお話しになるのが印象的であった。東京外国語大学ご在職中いわゆる大学紛争の頃であったが、学生部長を兼務されてご苦労されたとお聞きしたことがある。大変厳しい時期に学内行政の面でもご尽力された。1970年（昭和45年）1月に『素顔のモンゴル―未踏のアルタイ山塊に挑む―』（芙蓉書房）という御本をお出しになっている。その中でモンゴルの登山隊（隊長：ゾリッグ氏）と日本の登山隊が合同で西部モンゴルのアルタイ山脈のハルヒラー連峰に登頂した時の模様が記されているが、日本側の隊長は小澤先生であった。登山家としても面目躍如たるものがあった。先生にとりさぞ思い出深いものであったであろうことが良く伝わってくる。先生はモンゴル言語学の分野で『元朝秘史全釈』（上、中、下）、『元朝秘史全釈続攷』（上、中、下）（風間書房）、『中世蒙古語諸形態の研究』（開明書院）等々、「元朝秘史」モンゴル語研究などに関する数々の著書、研究論文を著されているが、日本におけるモンゴル研究のレベルの高さを世界に示された。また日本モンゴル学会の設立にも大いに尽力されたが、1971年（昭和46年）6月25日発行の『日本モンゴル学会会報』第1号に「日本モンゴル学会の設立まで―経過報告―」と題して設立の経緯について書かれている。学会設立以後、幹事、理事を経て会長として長年にわたりご活躍になった。また国際モンゴル学会の会長としてもモンゴル国の同学会事務局長Sh.ビラ教授とよく連携されて世界のモンゴル学をリードされその手腕を発揮された。国際モンゴル学会といえば1959年9月初めにウランバートルで第1回国際モンゴル学者大会が開かれた。その時、日本から参加されたのが大阪外大の楕松源一先生、東京外大の坂本是忠先生と小澤重男先生の3人である。その頃、勿論

日本は、まだモンゴル（人民共和国）、中国と外交関係がなかった。「日本を8月20日頃に立ち先ず香港に着いたが、中国通過の許可がなかなか下りず随分待たされ9日目にやっと許可が下り広州、北京を経由してようやくウランバートルに到着した。遅ればせながら学会に間に合った」とのことである。モンゴルに入国するまでに随分ご苦労された。この学会での小澤先生のご発表は「『秘史』の若干の動詞語尾について」（モンゴル文）であった。私は1976年8月開催の第3回モンゴル学者大会出席のため楠松先生とご一緒し新潟を空路（アエロフロート）で8月20日に立ちハバロフスク―イルクーツク経由で8月23日にウランバートル入りした。研究発表を終え学会終了後、他の参加者と数日間ウブルハンガイへ地方旅行に出かけた。これが私の初めてのモンゴル訪問であり、強く印象に残っている。帰途は国際列車でウランバートルを9月7日に立ち二連（中国国境）を通過、9月9日北京に到着したが、ちょうどその日は毛沢東の亡くなった日であった。また1990年8月14日－16日、ウランバートルで「『モンゴル秘史』750周年記念国際会議」が開催されて小澤先生も参加された。会議終了後ヘンティ・アイマグへ飛行機で他の学会参加者とともにエクスカーションに出かけた。到着後先生は、あまり体調は芳しくなかったようであるが、草原のゲルの中でいろいろモンゴル語研究のことなどを伺って和やかに語り合い過ごしたことが懐かしく思いだされる。これも今は思い出となってしまった。先生は研究、教育の面で多大の業績を残されたが、持ち前の強靭な意志と精神力で以て久しく国際モンゴル学会、日本モンゴル学会の学会活動の第一線に立ってご活躍されモンゴル学の発展に尽力されたことは私ども、いつまでも忘れることはできない。最後にこれまで小澤先生より頂いたご厚誼、学恩に深く感謝し先生の魂が安らかに眠られんことをお祈りしお別れのことばとさせていただく。

（2017年12月26日）